



日本科学未来館企画展「ロボット・ミーム」展 ～ロボットは文化の遺伝子を運ぶか?

ロボットを21世紀のメディアとしてとらえ、人と智能機械のインターフェイス(ロボットデザイン)を提案します。

藤幡正樹+銅金裕司、松井龍哉、山中俊治といった第一線で活躍するデザイナー/アーティストによって制作された3種のロボットを、空間デザイナー吉岡徳仁による空間インスタレーションのなかで展示します。

ロボット、映像展示、データベース、歩行シミュレータ、ロボットデザイン・ワークショップなど、すべて来館者とのインタラクティブな参加体験型の展示です。

科学技術振興事業団ERATO北野共生システムプロジェクト、東京大学大学院情報理工学系研究科智能機械情報学井上・稲葉研究室、東京大学大学院情報理工学系研究科中村・岡田研究室などの協力を得て、最先端のロボット研究を紹介します

会期：2001年12月1日(土)～2002年2月11日(月・祝)

会場：日本科学未来館 1階催事ゾーン

展示品制作：藤幡正樹+銅金裕司、松井龍哉、山中俊治、吉岡徳仁(空間デザイン)、東京大学大学院情報理工学系研究科中村・岡田研究室

主催：日本科学未来館

後援：文部科学省、東京都教育委員会

企画：日本科学未来館+国際ロボットデザイン委員会(IRoDA:松井龍哉、藤幡正樹、山中俊治、北野宏明)

協力：科学技術振興事業団 創造科学技術推進事業(ERATO)北野共生システムプロジェクト

科学技術振興事業団 戦略的基礎研究推進事業(CREST)

シンコール株式会社

東京芸術大学美術学部先端芸術表現科

東京大学大学院情報理工学系研究科智能機械情報学専攻 井上・稲葉研究室

株式会社日南

野村萬斎

理想科学工業株式会社

早稲田大学演劇博物館

入場料：日本科学未来館入館料に含まれます。

【企画主旨】

AIBOの登場以来、私たちは労働以外の目的で、ロボットと日常生活のなかで一緒に過ごすことが現実となりました。またASIMOの登場で、将来、ヒューマノイド・ロボットと一緒に生活することも現実感を持ってせまっています。この数年のロボット技術の急激な進展により、私たちとロボットの関係は大きく変化しました。私たちは、日常のなかで、今までにはなかった新しい存在感を持った(あたかも意識を持っていると感じさせるような)人工物の出現を目の当たりにするという、まったく新しい体験をしているのです。

私たちはここにきて、どのようにロボットを受け入れ、接するのか、新たな関係を模索する時期に入ったというべきでしょう。技術的な進展を追うだけでなく、文化や社会の問題としてもロボットを考えてみる時期なのではないでしょうか。

私たち人間にとってそもそもロボットとは何なのでしょう？ なぜロボットを開発するのでしょうか？ なぜロボットを見るとわくわくするのでしょうか？ なぜロボット開発の未来に対して期待と同時に戸惑いを感じるのでしょうか？

本展は、人間がロボットに対して抱くさまざまな親近感、恐怖、違和感などの感情の裏側にある文化的な意味や価値といった情報を、私たちの脳から脳へと伝播し、複製されてきた「ロボット・ミーム(文化的遺伝子)」として考えてみようという試みです。

そして、将来ロボット自身がミーム(情報)を運ぶ新しいメディアとなることを想定し、人と機械のインターフェイスとしての「ロボットデザイン」を提案します。

人間とロボットとの関係について、ヒト/ロボットの複製について、さまざまにイマジネーションを刺激される展示空間のなかで、今まで見たことのないデザインのロボットに接してみてください。それぞれのロボットデザインは、制作者が持っているロボット・ミームの反映であり、あなたがそのロボットに対して思うことは、ロボットがあなたに伝えたロボット・ミームです。

ミーム(meme):

人間の社会生活に有用で、遺伝子では伝えることのできない情報を伝える架空の文化的遺伝子。イギリスの生物学者リチャード・ドーキンスが著書『利己的な遺伝子』のなかで想定した言葉で、gene(遺伝子)と、ギリシャ語の mimeme(模倣) の合成語。

たとえば、日本のロボット研究者のなかには、幼い頃、「鉄腕アトム」を見てロボットの研究を志したという人が少なくありません。また、科学者ではない一般の方々でも、二足歩行ロボットが実現されたと聞けば、「鉄腕アトム」を即座に連想します。「鉄腕アトム」があったからこそ、日本では欧米諸国よりもヒト型のロボット(ヒューマノイド・ロボット)に対して抵抗感がなく、労働の機械ではなく身近な友達として感じる人が多いという見方もあります。この場合「鉄腕アトム」は、人から人へ伝播し、複製されていくミームだと考えることができます。

また一方で、ロボットはコンピュータ、インターネットに次ぐ新しいメディアとなることも考えられています。その時、ロボットは人間の文化の情報そのものを保有し、複製していくでしょう。たとえば映画『A.I.』の少年ロボットのデイヴィッドが、人間についての情報(記憶)を保存していたように。

< 本件に関する報道関係の方のお問い合わせ先 >

日本科学未来館 事業調整グループ 永井

〒135-0064 東京都江東区青海 2-41

TEL:03-3570-9153 FAX:03-3570-9150